

早期修了プログラム達成度自己点検シート【履修生用】

提出日：平成 26 年 ○ 月 ○ 日

履修(希望)者氏名:筑波 太郎

(希望)専攻:リスク工学専攻

指導(希望)教員名:宮本定明

指導(希望)分野:ソフトウェアエンジニアリング, 特にメタ戦略とその応用

観点	項目	自己評価レベル				自己評価の根拠(以下:記入要領)	各研究科・専攻での特記事項等
		入学時 審査時	中間 審査時	予備 審査時	最終 審査時		
知識・能力	① 専門基礎:入学者の専門分野について、博士の学位にふさわしいレベルの基礎能力を有しているか。	A				別添業績リストに示すように、これまでソフトウェアエンジニアリングのメタ戦略の応用に関して、2編の査読付き学術雑誌論文が刊行されている。2004年に発表した計測制御学会論文では、メタ戦略の新しい適応戦略アルゴリズムを開発し、ネスティング問題に応用した。この論文は筆頭著者として書いており、アルゴリズム開発、プログラム開発、適用試験すべてを担当している。また、2005年のSoft Computing誌では、やはり第一著者として、メタ戦略アルゴリズムを高度化し、マーケティング問題に適用して、効果を実証した。この論文におけるアルゴリズムは、計測制御におけるものよりも、はるかに高度化されており、計算幾何学の知見などを利用している。また、この手法は実用システムとして商用化されており、システムのプロトタイプも申請者が行った。これらの成果から、専門基礎の項目については、博士のレベルであることを主張する。	
知識	② 関連分野基礎:専門に関連した分野について、専門分野ほど深くはないとしても、博士の学位にふさわしいレベルの基礎能力を有しているか。	A				修士在学中に、ソフトウェアエンジニアリング基礎論Ⅰ、Ⅱ、演習、その他、ネットワークセキュリティ、離散数学と暗号など、情報システムとそのリスクについての科目を習得した。(リスク工学専攻、ソフトウェアエンジニアリング分野) さらに、特別講義、研究室のゼミ、雑誌論文などで高度な知識や技術に関する情報を取得したいと考えている。	
分析力	③ 現実問題に対する分析力:現実の問題について、博士の学位にふさわしいレベルのセンス・見識を備えているか。	A				申請者は、〇〇県XXセンターに10年間勤務し、その間、現実の問題として、ネスティング、マーケティング、積載問題のプロジェクトを手がけてきた。開発したシステムはすべて実用に移されており、特許申請(共同)も3件行っている。また別に、耕作用ロボットの開発を手がけ、学会発表を行っている。さらに、射出成型エキスパートシステムの開発も手がけている。	
教養	④ 広い視野:博士の学位にふさわしい視野の広さを有しているか。	A				上記の現実の問題のなかで、様々な現場の技術者と議論し、関連分野として、人工知能、運輸分野、農業機械分野、情報システムについて学習を行った。従って、博士にふさわしい広い視野を有していると主張する。	
総合力	⑤ 問題設定から解決まで:専門的応用能力である問題設定から解決までのプロセスを理解し、具体的解決に導くことができるか。	A				上記の現実問題においては、単に新規性のあるアルゴリズムを開発すれば足りるというのではなく、まず問題の所在を明らかにするため、関係者と討議を重ね、関係者の意図に沿ったシステム開発を行ってきた。射出成型エキスパートシステムの開発がこれに相当することはいうまでもない。また、積載問題では、利用者に便利なインターフェースや、利用者の知識を取り入れた開発を行ってきた。このように、上記の開発には、問題設定から解決までのプロセスが含まれている。	

表現力	⑥ コミュニケーション能力と国際的通用性:博士の学位にふさわしいプレゼンテーション能力とコミュニケーション能力を有し、専門分野において国際的に通用する学識を備えているか。	A			下記の国際学会発表を含めて、学会発表回数は18回に及んでいる。また、競争的プロジェクト申請・審査および成果発表のためのプレゼンテーションも10回以上行っている。国際学会のうち3回は、海外で英語による発表を行った。また1回については国内で英語発表を行っている。コミュニケーションやプレゼンテーション能力向上のためにTOEFLを毎年受験しており、下記のように学術雑誌論文2件の内うち1件は外国語論文である。	
総合力	⑦ 学術的成果:博士の学位を授与してよいと判定できる学術的成果を有しているか。	A			これまで、査読付き学術雑誌論文2編および査読付き国際会議論文5編を発表している。これらはすべて筆頭著者であり、国際会議のうち4回は申請者が発表している。◎◎国際会議で発表した論文は○○分野においてベストペーパー賞を得た。また、論文発表での研究の立案から解析までの全てにおいて申請者が主導している。	

注1: 自己評価レベルについては、「A(博士の学位にふさわしいレベル)」、「B(修士の学位レベル)」、「C(学士の学位レベル)」を基準として自己評価を行う。

注2: 自己評価で「A」評価とし、教員側の評価においても「A」評価とされた項目については、「自己評価の根拠」欄に「達成済み」と記入すること。
ただし、その場合でも、さらなる進歩(例えば、新規能力の獲得、公表論文数や学会発表数の増加)などがある場合は、それらを付記してよい。

注3: 「最終審査時」の達成度自己評価は不要とする。

注4: A4用紙で2枚程度に収まるように記入する。なお、記入セルサイズの変更を可とする。